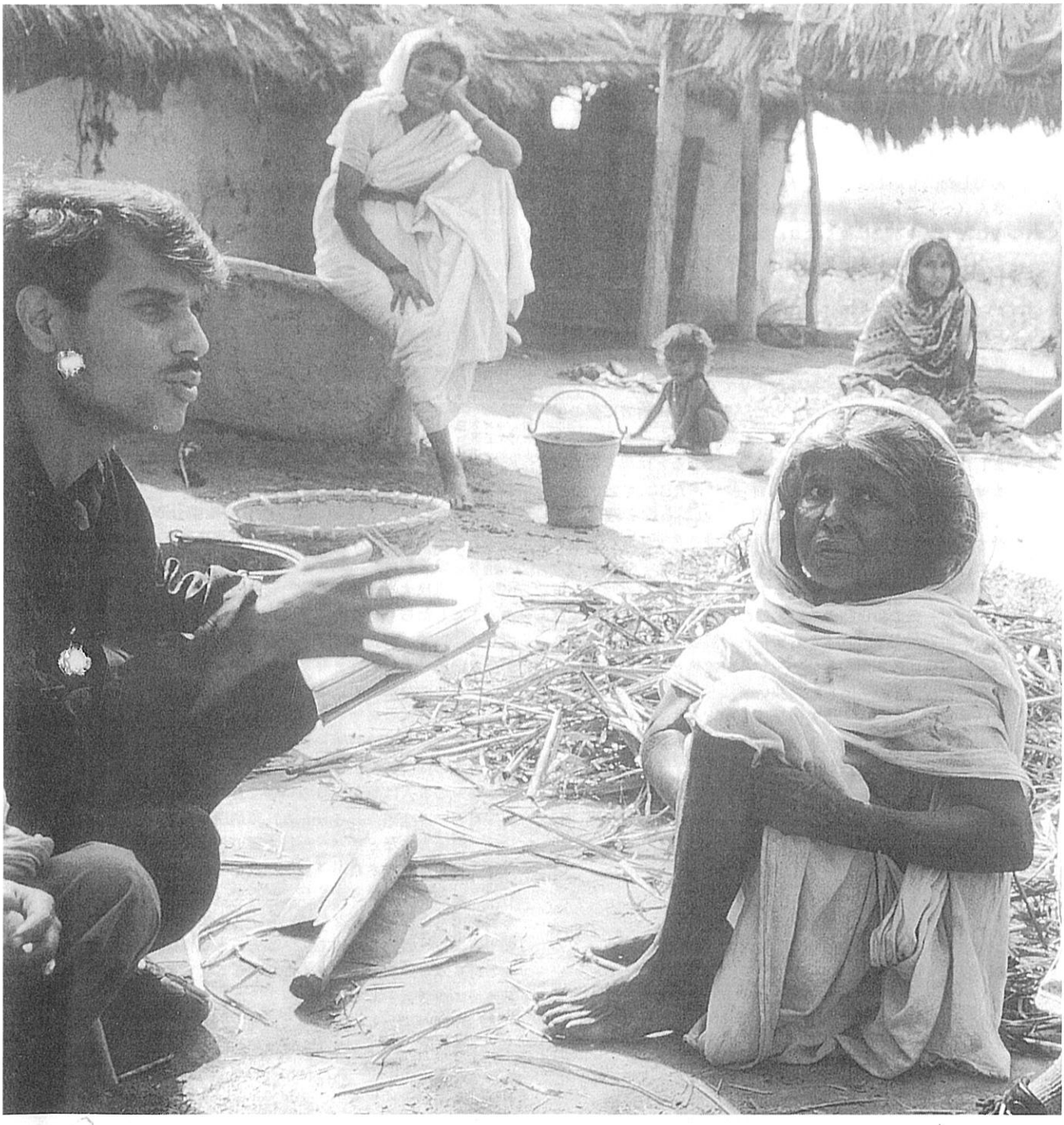
ISSN 0913-3321

盲人のための
国際シンボルマーク

愛の光通信

No. 5 1990年11月

東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局



ネパール・ナラヤニ県バラ郡でのフィールド・ワーク

ネパールで日本式点字印刷技術指導から帰って

点字出版局印刷課長　佐藤　実

「ネパール盲人福祉協会の点字出版所を、指導してほしい」と井口局長からの要請があり、私は英語もネパール語も話せないので、果してお役に立つだろうかと自信がありませんでした。しかし、通訳にネパール人のモンジュ・ダハールさん（ヘレン・ケラー学院で鍼灸を勉強中）を同行させるとのことで私の不安は軽くなり、第２回スタディ・ツアーの皆さんと共に出発しました。

この時私は35年前の忘れられない思い出が浮かんできました。それは昭和30年６月、日本を訪問されたヘレン・ケラー女史との出会いでした。東京ヘレン・ケラー協会主催の講演会のあと、パーティの席で故一色学院長が最年少の私（当時20才）を呼び、紹介して握手をさせてくれました。ヘレン・ケラー女史は「世界平和のために、アジアの障害者に愛の手をさしのべてほしい」といわれ、私も「はい」と元気に答えました。あの約束がこうした形で実現できるとは思ってもいませんでした。

ネパールに着いたのは12月25日、それから約１週間、ネパールの休日も返上させて点字印刷所のスタッフを特訓しました。

カトマンズにあるネパール盲人福祉協会は、バグマティ川に沿った一角の古い仏教寺院の中にあります。10畳位の部屋が点字印刷所です。日本から贈られた製版機、印刷機（各２台）と中央に校正用の古いテーブルが雑然と据えられて、人１人がやっと歩けるくらいの狭い所に５人のメンバーが働いていました。リーダーは元中学校の先生ホーム・ナット・アルヤール君（27才）で教育と印刷の担当。ラム・プラサド・ティワリ君（24才）は製版担当、テクナス・ネウパネ君（26才）は全盲の大学生で週に３・４回校正をしています。アンビカ・シュレスタさん（25才）は弱視の女性で製版担当、ビ

シュヌ・シュレスタ君（28才）は元兵士、印刷・製本を兼ねた雑役係で、私が行くとすぐに敬礼して「ナマステ！何か仕事を下さい」とよってきます。

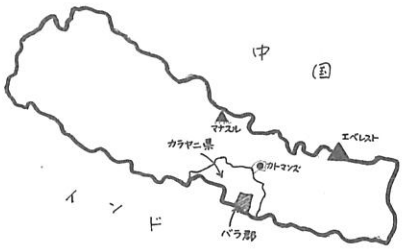
製版機をみると６点センターの重要な部分が錆ついて、キィ・ペタル・レールなどに油と砂がザラザラにこびりついており、整備の悪さに驚きました。印刷機が異様に重い音を出すので点検すると、ゴムローラーの締めすぎとわかり、そのままにしたらローラーが変形してモーターが故障する寸前でした。以前、機械に関する説明書（英文）を送ったのですが全く理解されておりません。早速モンジュさんの通訳で点センターの分解・組立の技法と研磨の仕方を時間をかけて教え、本体各部の名称や部品、工具の名称を日本語で覚えるように（部品取替時の便宜を考慮して）指示しました。一通り日本式の作業工程をモンジュさんとコンビで実演すると、メンバーの５人は驚きとためいきで首をかしげました。（わかったという意味のあらわし方）印刷所の壁に作業の手順や注油、掃除方法などネパール語で書いた紙を貼っておきました。全盲のネウパネ君が「自分は校正の他にやれる仕事がないか？」と質問してきました。そこで「日本の盲人は印刷でも製版でも立派な仕事をしている。そして点訳した本を図書館や盲学校へ寄贈している」と答えるとまたびっくりしていました。本を点訳することも寄贈することも驚きなのです。私は彼に点訳者として活躍するよう激励したのでした。

人助けはむずかしいものです。物を沢山送ればすむということではなく、やはり援助というからには、あちらへ行ってあちらの生活の中で一緒に仕事をしながら発展のための方法を考えるのが大切だと思いました。ネパール中に沢山の点字本を出すこと、その勝負はこれからのようです。

本格的に活動開始―ＣＢＲ（農村リハビリ）

プログラム・オフィサー　佐々木秀明

埃の山道と、
2500メートルもの頂を越えて７時間。
ここはタライ平野である。
８月の亜熱帯は、想像をはるかにこえて暑く、
汗ばむ肌に風は感じられない。
点在する集落は、どこか、
時間と空間の座標軸を狂わせてしまう。



当協会が実施する第３次プロジェクト「視覚障害者（児）のためのＣＢＲプロジェクト」が、ネパール・バラ地区において、1989年６月にスタートしました。このプロジェクトは、３年間の計画で行なわれるもので、ネパール政府の社会事業調整協議会と当協会の協定の下で、ネパール盲人福祉協会を実施責任機関として、当協会の監督のもとに開始されています。

当初は、1989年３月の協定調印後、プロジェクトを開始する予定でしたが、インド・ネパールの通過・通商条約期限切れ問題による国境封鎖によってネパール国内の経済状況が混乱し、止むなく同年６月のスタートとなりました。

このプロジェクトの事業費は、当協会自己資金と香港リハビリテーション協会、丸紅基金、庭野平和財団、外務省ＮＧＯ補助金、トヨタ自動車（車両２台）の助成によって負担されています。

ＣＢＲとは

私たちのＣＢＲは、農村地域に居住する視覚障害者に、種々のサービスを提供することによって、その障害者が地域社会で自立した社会生活が営まれるようになることを最終的な目標としています。障害者の９割もが農村地域に住むネパールのような国では、施設中心のリハビリテーションだけでは必ずしも効果は上がりません。

ＣＢＲは、主として発展途上国において、その国の実情に合った新しいリハビリテーションの方法論として国連を中心に近年開発されてきたもので、多くが途上国の農村地域で展開されるところから「農村リハビリテーション」とも呼ばれています。

ＣＢＲの特長は、１．低コストで、２．多くの受益者に、３．効果的なリハビリテーションを行なう、の３点に要約できます。また、地域社会で展開されるため、障害者の家族やその地域の人々の理解と参加を不可欠な要素としており、そうしたネットワーク作りから私たちのプロジェクトも開始されています。

地方協力委員会発足――スタッフの採用

今回、ネパール盲人福祉協会と共同でＣＢＲを実施している地域は、首都カトマンズの南に位置するナラヤニ県バラ郡、ジープで７時間ほどのところです。亜熱帯のタライ平野の典型的な農村地帯で、広さは東京都ぐらい、約34万人が居住する地域です。

1989年６月30日、バラ郡カレーヤにおいて、ネパール盲人福祉協会プラサド議長のリーダーシップのもとに、ナラヤニ県知事、バラ郡郡長、助役、教育長、ソーシャル・ワーカーなどの参加を得て、第１回プロジェクト会議が開かれ、ＣＢＲの機能と役割についての討議の後、７名の委員によって地方協力委員会が組織されました。

７月１日、新しく発足した地方協力委員会とネパール盲人福祉協会のメンバーはＣＢＲを、バラ郡の二つの地域（人口９万人以上）で実施することを決定し、その準備にとりかかりました。まず最初に行なったことは、このプロジェクトを現場で支えるスタッフの募集です。８月22日から１カ月間行なわれ、プロジェクト・オフィサー、アシスタント、雑務、各１名、フィールド・ワーカー４名の定員に対し、165名の応募があり、地元の関心の高さを示しました。

９月28日、ネパール盲人福祉協会のメンバーが監視するなか、地元カレーヤの高校で筆記試験が、10月27～28日面接試験が行なわれ、プロジェクト・スタッフが選考されました。彼らは、この地域で生活している人たちで、特にフィールド

・ワーカーは、担当地区の言語や習慣に通じており、地理的状況に明るく、それぞれの集落を良く理解している人たちです。このことは、ＣＢＲにとって大変重要な要素です。障害者に教育や訓練を受けさせることに馴染めない家族や集落の人々の拒否に出会うこともあるわけで、カーストや共同体の特殊性を理解している人でなければ、地域の協力を得ることができないからです。

地方協力委員会は、この間、スタッフのための事務所の提供、事務用品や用具購入費などを、地元の協力を得て用意し積極的に活動しています。このことは、外国からの援助だけに頼らない地元の努力の現れで、ＣＢＲの考え方に添うものです。

スタッフ訓練～ホーム・サーベイ（全戸調査）～リハビリ

1989年11月から６週間、カレーヤの現場において、フィールド・ワーカーへの集中訓練－ＣＢＲや視覚障害者を理解するための講義や戸別調査の方法、リハビリのための実践的訓練など－が行なわれました。そして、この訓練を踏まえてフィールド・ワーカーたちは自転車を使い、それぞれに割り当てられた地区の全戸調査を開始しました。

調査対象地域は、№－１地区10ケ村、№－２地区12ケ村（14,759世帯、95,659人）で、その中から視覚障害者97人、白内障患者1,172人、その他の眼疾患患者2,259人をリスト・アップし個人別のファイルを作成しました。ちなみに、年齢グループ別でみると、

視覚障害者（児）	0歳～ 5歳	9人
	6歳～15歳	6人
	16歳～45歳	28人
	46歳以上	54人
白内障患者	16歳～45歳	152人
	46歳以上	1,020人
その他の眼疾患	0歳～15歳	61人
	16歳～45歳	804人
	46歳以上	1,394人

合計3,528人という、調査結果が出ています。

この間、1989年12月から４カ月間、当協会担当者がカレーヤの現地に駐在し、現地スタッフと共に戸別調査に参加、助言・指導をしながらプロジェクトの管理を行ないました。

現在、調査結果を基に、リスト・アップされた障害者に対し、個別の状況に応じたサービスを展開しています。具体的には、学齢期の10人の視覚障害児に近くの学校での統合教育を受けさせ、働ける41人の視覚障害者には収入の道を開くための、水牛、やぎ、にわとりなどの飼育・ロープやマット作り・竹細工・雑貨店経営などの訓練を、また、カウンセリングが必要な35人の視覚障害者には、歩行と日常生活の営み方の訓練を行なっています。そして、白内障患者やその他の眼疾患患者には、近くでアイ・キャンプ（眼科移動診療）が開かれる時、連れて行き、手術または治療を受けさせています。

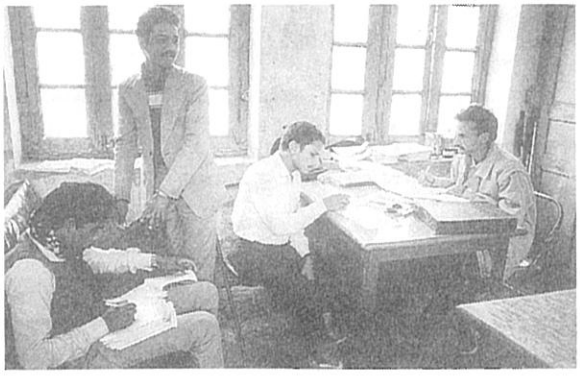
今年１月、私たちのＣＢＲ対象地区のバトラ村で24時間テレビ（日本テレビ）との共同で、アイ・キャンプが開かれました。この時、438人の眼疾患患者が診察を受け、その内の6人が白内障の手術を受けました。また、31人の視覚障害者が診察を受けた結果、11人が治療によって治ることが確認され、ビルガンジの眼科病院へ送られています。

このアイ・キャンプは私たちのプロジェクトが、他のプロジェクトと、お互いに協力することによって成果を上げることができた１例と言えます。

統合教育と点字巡回教育

私たちは、このＣＢＲの中で、既に、点字教育を行なっていく専門の教員２名をカトマンズで養成しました。首都のトリブバン大学教育学部に設けられた５カ月間の短期訓練コースで、視覚障害児教育方法論を学ぶためのものです。今年度、バラ地区からはＣＢＲの拡大に伴って新たに３名が派遣されることになっています。

訓練を受けた１人の教員が派遣されることによって、その学校では３名から10名ほどの視覚障害児の受け入れが可能となり、その学校を中心とした点字巡回教育で、20人から30人の点字教育が行なわれるようになります。このことは、就学



年齢児童を直ちに統合教育校に入学させる余地のない現状では、就学前の基礎教育として有効です。

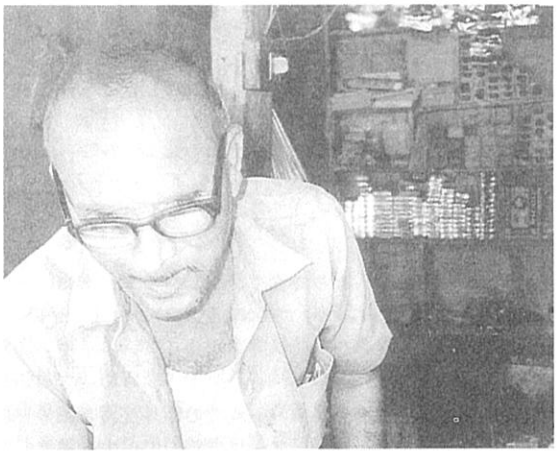
私たちのＣＢＲは、今年７月から２年目のプログラムに入りました。

トラコーマや白内障、それに栄養障害（ビタミンＡ不足）による失明者が後を断ちません。

私たちは、このＣＢＲによって失明予防教育の徹底、視覚障害児教育の普及、フィールドにおける眼科治療の普及、働ける盲人の職業開拓を追及していきます。

おじさん、自立しつつある、の記

ＣＢＲでは盲人が職業的自立をするための資金を無利子で貸し付けている。この資金で雑貨店を開店した盲人に会った。店は、カレーヤの小学校の近くにある。目が悪くなると同時に連れ合いに逃げられてしまい、今は娘さんと生活しているらしい。50才がらみのこの経営者は私たちに、道具を使って売り物の木の実を割り、商売の実技を披露してくれた。屈託のない笑顔が印象的でした。



●ネパールこまぎれレポート

ホテルから一歩外に出たとき、私を追いかけて来た若者がいる。彼は、そのホテルの庭内にある皮製品を売っている店から出て来たようだ。所在なげにしていた私はその青年に目をつけられたらしい。カタコトの日本語と人なつこさに私の気持ちは和んでしまった。法律家を目指して田舎から首都に出て来た彼は、トリブバン大学に学びつつ、この店の店長として働いている。生活のためである。「私の店の品物ネ、安くて良いヨ」としきりに勧められたが、ネパール初日の私は未だお土産を買う余裕はなかった。今、私の手元には、年来の知己のように一緒に写っている写真が一枚ある。

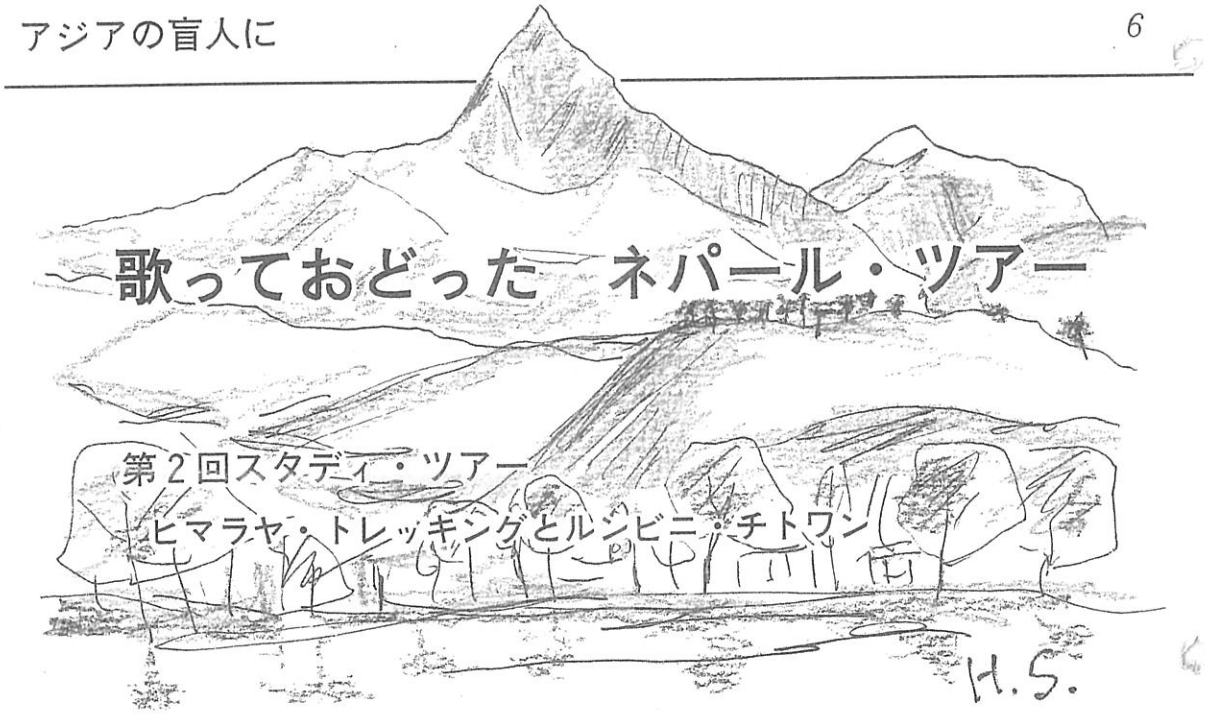
＊　　＊　　＊

カーラジオから流れてくるニュースに耳を傾けていると、どうも同じ内容のものが、他の言葉でも繰り返されているようだ。不思議に思って尋ねてみると、今まではネパール語と英語で放送されていたものが、この春の民主化要求運動をきっかけにヒンズー語、ネワール語が加わったという。多言語の国であってみれば彼らの要求も当然のことではある。

＊　　＊　　＊

大雨による土砂崩れのため、バラ行きの予定が立たない。開通を持って出発した私たちは、しかし、その道のあまりの悪さに辟易してしまった。「ネパールだ。こんなもんか！」と悟りの境地に達するや、今度はいきなり急ブレーキ。「なんだなんだ」とジープを降りて前方を見やると、なんとシャベルカーが道を塞いでいるではないか。また土砂崩れだ。しかも、シャベルが右から左に動く度に、その振動で土砂が作業員の肩先をかすめるように崩れ落ちてくる。いつ終るともない作業風景。しかたなく土手に座り込み、持参の握り飯をほおばる。バラへの道のりは遠い。―これがネパールだ。

平成２年10月より事務局担当者が、野崎泰志から佐々木秀明に替りました。よろしくお願い申し上げます。



ネパール・ツアーに参加して

御本小一郎

私はヘレンケラー協会がネパールでの海外援護事業の一環として計画したネパール・ツアーに参加して、大変得るところがあった。私は３番目の息子に介添えをしてもらって、約10日の旅行に加わった。12月25日午前10時に成田を飛び立ち、途中香港で乗り継ぎ、ネパールのカトマンズへ夕方着いた。ヒマラヤ・ホテルに旅装をとき参加者一同で懇親会を開いたが、仲々愉快な雰囲気であった。私はこれで海外旅行は５回目であるが、そのうちヨーロッパとアメリカを訪ねたこと、中国へ行ったこと、この２つとも非常に有益でありかつ愉快であったが、この度はまたさらにさらに私に大きな感銘を与えてくれた。

ポカラにある大きな湖を舟で渡ったり、あるいはまた、チトワンでナラヤニ河の流れを舟で下ったりした。この河には、ワニが出るからあまり大きな声でさわがないようにと注意をうけたが、ワニの出るような河に遊んだことなどは全くはじめての経験であった。また自然公園のジャングルの中を象の背中に乗って、2･3時間も回ったのも私にははじめてのことで、こんな経験をした人は数少ないだろうと思うと、生きているよろこびを感ぜずにはいられない。

ネパールは人口約1800万、その中盲人が約15万人いるとのことだが、その人々に対する教育は、一寸手についたというところで、本当に幼稚で貧弱なものである。学校も見せてもらったが、私は寄宿舎の設備をみて思わず涙したものである。ヘレン・ケラー協会がこんなところに目をつけられて援助の手を伸ばしてくれたことに、私は感謝せずにはいられない。一般の人々への福祉がまだ充分でないところで、まして限られた盲人の福祉などを考えるのは無理なこととは思うが、それにしてもヘレン・ケラー協会がよくもこうしたところに愛のともしびをかかげてくれたものであると、私は心の底から感謝するものである。

この地に落ちた一粒の麦が立派に成長するであろうことを請い願いつつ筆をおく。

貧しくとも心豊かに

岡山　美恵子

12月27日快晴。カトマンズからポカラに向う機上、窓外は憧れのヒマラヤ。映像や写真で何度も何度も目にした神々の山は、私の心を色とりどりの風船で一杯にしてしまう。うれしい!!　来てよかった!!

少々の人みしりも体力に対する不安も吹きとんでしまう。涙をこらえて雪山に見入る。シャッターを押す時間ももったいない。しっかりと私の心に焼きつけましょう。

窓ガラスに手をやるとヒンヤリと冷たい、外はヒマラヤの空気だ。何という幸せ、何というよろこび。

ネパール旅行10日間、私はこの思いを、カトマンズの街角で触れ合った人々、ツロコットの丘の夕日に染まるシェルパ達、行き交うさまざまな人達の中で、熱く深く燃焼させたように感じます。

貧しい国ネパール、物質的に不足だらけの国ネパール、その中で精神的な豊かさ、心の文化を大切に守っている彼ら。私も努めましょう。心が貧しくならないよう！

そしてかの国も心ある大勢の人々の協力を仰ぎ、弱い立場にある者が明るくさわやかにすごせる、そんな日がより早く訪ずれますよう祈っています。

最後に私にすばらしい旅を与えて下さった協会の皆様とやさしさ溢れる私の家族に感謝いたします。

チトワン・ワイルド・ライフ キャンプのおもいで

高井史子

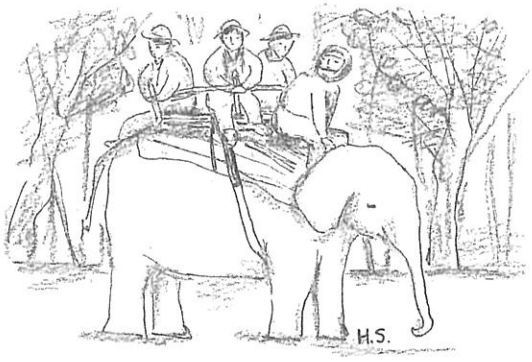
29日私達ガイドを含めて13人はチトワン国立公園にあるテンプル・タイガーのワイルド・ライフ・キャンプをたずねた。バス・牛車と乗りついでナラヤニ河をボートで渡り、象に乗って40分ほど行くと、小高い所に突然そこだけが切り開かれてキャンプ地があった。着いたのは7時すぎ、夕方になるとかなり冷えるので温かいミルクティのサービスはとてもうれしかった。このキャンプは主に外国人観光客用に造られたもので、大きな茅ぶき屋根の下にベットが2つ入るテントが20個、水洗トイレとシャワー室になったよしず作りの小屋もいくつかある。あとで、このお湯はドラム缶に水をくみ、人が薪(まき)で沸かしているのだと聞き、使うのがなにか後めたいような気がした。

夕食後、カルチャー・ショーをみた。従業員が歌い手・踊り手に早がわりする素朴なもの。みているうち太鼓のリズムにさそわれて、段々踊りの輪に加わる人がでて、最後には全員寒さを忘れてコプラ・ダンスを踊った。

ここは電気が来ていないのでランプの生活。夜、トイレに起きるとガードマンがとんできて灯(あかり)をもって案内してくれる。寒いだろうと沢山着こんでベッドにもぐりこむと、そこに温い湯タンポ、感激して眠った。夜中にパラパラと屋根をうつ雨のような音がして心配したがそれは霧が深いため気温が下がると水滴になって落ちるのだそうだ。

30日午前中は4人ずつ象に乗ってジャングルのミニ探検。眉間(みけん)のあたりをそっと触ったら象はすごく暖かかった。背中までの高さは2.5mほど。らせん階段で登る。象は背の高い草を踏みわけ、鼻でじゃまな枝を折ってよけながら、ユッサ・ユッサと歩く。冷たい葉っぱが頬をなぜる。ときどき象つかいの“ディアー”とか“モンキー”という声にみんな緊張して目をこらす。イエローバードのやさしい声も聞える。坂になると体が傾くので私たちは落ちないように木枠にしがみつく。象は落したカメラケースを鼻で上手に拾ってくれた。とうとうサイにはお目にかかれなかった。

素朴で人なつこい人たち、むじゃきな沢山の子供たち、ミルクティとカレー味の国、ネパール。カンマンズをはなれるとき思わず涙ぐんでしまったわたし……ダンネバー。



はじめてのネパール

川島昭恵

登山に興味をもちだした丁度やさき、「ヒマラヤ・トレッキング」という記事をみつけた。そしてそのままほとんど衝動的に申しこんでしまったのだが、このネパール・ツアー、期待以上にはるかにすばらしかった。

今日からトレッキングという日、ルンビニへ向かう一行と別れ勇ましく私達はバスを降りた。2泊3日では、麓の村々をちょいとお散歩という程度だろう。しかし実際に自分の足で踏みしめ、空気を感じ、現地のシェルパやポーターとともにキャンプ生活できることがうれしかった。

日射しは暑い。人なつこい村の子供たちが話かけてくる。片言の英語でも結構コミュニケーションはできる。いや黙って手をつないでいるだけでも確かに通じあうものがあった。

目的地に着くとすぐにシェルパがレモンジュースをサービスしてくれる。さわやかな風に汗がスーッとひいていく。そして甘ずっぱい液体が喉を通過すると、もうわけもなく幸福(しあわせ)がこみあげてくるのである。

日が暮れると冷えるのは早い。大テントでの夕食がまたいい。その日あったことをあれこれしゃべりながら豪快に食べる。健全な生活のおかげでやけに食欲があるのだ。

食後はテントの外で、シェルパと私たちごちゃまぜになって歌ったり踊ったりの大さわぎ。あの空気の冷たさと歌声は忘れられない。

かなり重症のネパール熱にかかり、東京に帰ってからも、しばらく立ち直れないほど、いまもあの地に引かれている。はじめてなのに、なんとなくなつかしい国、ぜひまた行きたいとつよく願っている。

ヘレンケラー協会、近畿日本ツーリストの企画をしてくださった方々、ほんとうにありがとうございました。心から感謝しています。

ビスターリの国

荒木　薫

「ビスターリ、ビスターリ」トレッキングをリードする若いシェルパが声をかけてくれる。「ビスターリ」とはネパール語で「ゆっくり」の意味である。常につかず離れずの距離を保ち、危険な所にさしかかると、さっとフォローしてくれるのだ。ときには歌を口ずさみ、ジョークをとばし合いながら、彼ら自身も十分楽しんでいる。私はふと「ともに生きるってこういうことなんじゃないかな」と思った。初めて盲人に同行した彼らには過剰な気負いがなく、カバーがごく自然であり、自分たちのトレッキングを楽しみ、そして楽しませてくれたのである。

このツアーは私にとって単なる観光ではなかった。ネパールの空・雲・山・湖……自然のすばらしさはいうまでもないが、盲学校などを訪ねたり、通りすがりで子どもたちと交流することもできたのだ。トレッキングの楽しさといったら、私の生涯での“楽しいことベストテン”上位入賞は確実である。

あどけない子どもたちも最後には「1ルピー？」といってくるのにはやるせない思いがしたし、最貧国といわれるこの国では、確かに『文化』は発展途上かもしれない。けれど、文明の利器に頼らなければ何もできない私たちにくらべ、彼らの生きる知恵ははるかに優れているのではないだろうか。もちろん、受けたいのに受けられない医療や教育を、日本などが率先して共有できるようにしていくならば、より豊かな生活が送れるだろう。

日常、早く急いで事をなさないと焦りを感じてしまう自分を客観できる瞬間「ビスターリの国」を思い起こすようになった。

ツアー一行は、ポカラのアマルシン・ハイスクールの盲教育セクションを訪れ、校舎建て替え資金の一部にでもと、その場で全員募金をし、5,620ルピーを寄付した。

日本ネパール協会主催の「ねぱーる・ひろば」今年度第1回6月16日に「ネパールの女性と仕事」をテーマとして当学院の研修生モンジュ・ダハールさんが、立派な日本語ですばらしいスピーチをされました。その要旨を下記に掲載いたします。

女性の仕事と家庭

モンジュ・ダハール

私は大学で医学の勉強をし、医者になること、そしてネパールの貧しい人々のために働きたいというのが夢でした。私はネパールで医療活動をなさっている山根さんの鍼治療をみて感動し、薬を使わないで治療するというこれこそネパールでできる医療であると思い多くの方々のご助力により現在東京ヘレン・ケラー学院で勉強しております。

私は結婚しており、夫と子供は国で夫の家族とともに暮らしています。そして私の精神的な支えになっています。私が家族を離れて学ぶことができるのは、この大家族制度で守られているからだと思います。しかし、この大家族制度も次の世代では問題になってくるでしょう。

現在ネパールでは大学進学、就職する女性は10%位です。結婚、出産で退職という風習はありませんが、育児のため辞めざるを得ないのが増えているのは事実です。つまり結婚、仕事、出産、育児のバランスだと思います。今日本でもそのバランスが崩れているように思います。同じ女性としてこの問題について考えて行きたいと思います。

ネパールの村では、男は出稼ぎで外へ出て女性が家を守り、家事、子育て、農作業をしなければなりません。今は教育も昔に比べて普及しましたが、田舎では女の子は早く学校を止め、小学校位から家庭のお手伝いをします。15．6才位で結婚させられます。お嫁に行った先では牛のように猛烈に仕事をします。

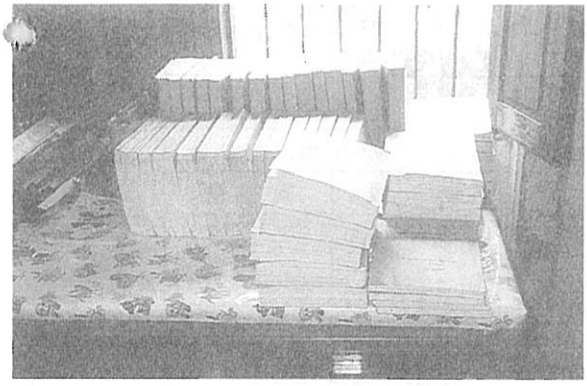
さて私の夢である医者になるということと家庭とは反対のように思われ、私は良い妻なのか良い母なのか悩むことがあります。しかし、カトマンズで待っている夫、子供やネパールの人々は私の励みになっていることも事実です。

1989年 度 事 業 報 告

1．点字印刷所技術指導

ネパール・カトマンズ点字印刷所で稼働している製版機、印刷機各２台のフォローアップのため、出版局印刷課長佐藤実と当学院聴講生モンジュ・ダハールを派遣し、約１週間徹底した技術指導を行なった。その結果、機械の管理、保守、作業手順、製本技術の面において著しい向上を見、堅牢な表紙付きの点字教科書が次々に各校へ配送されるようになった。

今後の計画としては、現印刷所が狭く、環境も良好とはいえないので、ネパール側とも検討を重ねた上で建物の新築を目標とし、さらに効率よい点字印刷所にしたいと考えている。

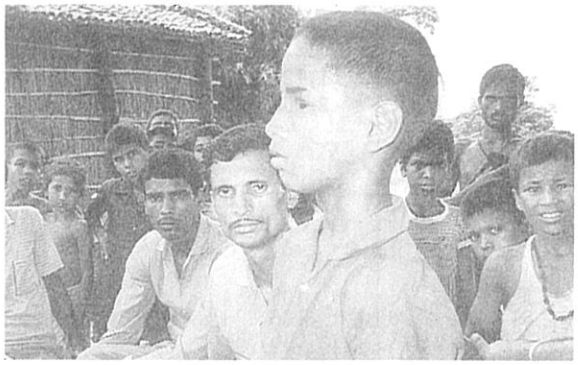


2．農村リハビリテーション（ＣＢＲ）活動開始

インド・ネパール間の通商通過協定失効に伴う、国境封鎖問題が1989年３月以来発生し、プロジェクトの開始が約半年ほど遅れることとなった。事態が好転した９月から、10月にかけて現地スタッフの採用を公募で行い、約170人の応募者の中から６名を選抜した。11月から12月にかけて６週間、バラ郡の中心地カレーヤにおいて集中訓練を現地スタッフに施した。幸いカレーヤ地方政庁の一角にそのご好意によって無償でＣＢＲ事務所を設置することができた。１月よりプログラムの最初の段階であるホーム・サーベィ（戸別調査）を開始、各フィールド・ワーカーは全戸の訪問調査を行い、データを収集した。

トヨタ自動車㈱より寄贈された２台の車両ミニバス・ジープ（合計450万円相当）は、２月にカトマンズに到着、登録手続きを完了し活用され始めている。なお、ＣＢＲの経費の一部は、丸紅基金（250万円）、庭野平和財団（100万円）と、日本政府外務省（230万円）から得ることができたものである。特に後者は昨年度から発足したＮＧＯ補助金制度の最初の配分によるものであり、全国で15団体という数少ない団体に当協会が選ばれたものである。

今年度は準備期間としての各種調査も終了したので本格的なリハビリテーションの実施に入ることになった。



3．第２回スタディ・ツアー実施

88年度に続いて第２回目のスタディ・ツアーを行なった。今回は香港経由の10日間（ネパール８泊香港１泊）とし、８名の全盲３名の弱視の方を含む20名が参加した。12月25日成田を出発し香港乗り換え、夕刻にカトマンズに到着した。カトマンズでは、ネパール盲人福祉協会を表敬訪問、日本全国に呼びかけて集まった品々（点字板49枚、点字タイプライタ１台、カセットレコーダ１台、盲人用時計４個、点字用紙等）を贈呈し交流を持った。またドウリッケル高校の盲教育セクションを訪問、校長先生以下盲児童たちの歓迎をうけ、点字板などを寄付した。

27日、28日は全員ポカラに滞在、アマルシン高校の盲教育セクションを訪れ、学用品とともに、参加者の発案でその場で募った5620ルピーを校舎の建て換え資金にと寄付することができた。

29日からは、ヒマラヤ・トレッキングと、ルンビニ・チトワン自然公園の２コースに分れ、それぞれネパールの雄大な自然を楽しんだ。

このツアーの目的は、ネパール王国の視覚障害者との交流はもちろんであるが、ツアー参加者の手荷物重量20kgの一部を使わせていただき、プレゼント物資を輸送することができるので、今後とも参加者が一人でも多いことを望んでいる。（ツアー参加〆切りは毎年８月末）

1989年度会計報告

自　1989年4月1日
至　1990年3月31日

海外事業

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
協賛金収入	1,721,101	㈱毎日写真ニュース	事務費		
募金収入	2,065,630	芝田熊雄 他 139件	賃金	3,500	
			旅費	79,190	
			一般物品費	0	
			印刷製本費	251,200	
			会議費	0	
			役務費	270,071	
			借料損料	204,804	
			雑費	144,705	
			事業費		
販売収入	103,684	バザー	海外援護費	480,154	ネパール点字出版
雑収入	106,833	預金利子	海外出張費	411,173	
前年度より繰越	5,046,681		次年度へ繰越	7,199,132	
合計	9,043,929		合計	9,043,929	

農村プロジェクト特別会計

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
助成金収入	4,615,000	丸紅1315千円 庭野1000 〃 ODA 2300 〃	海外援護費	7,000,000	
			海外出張費	1,500,085	
寄付金収入	4,700,000				
雑収入	599,321				
前年度より繰越	5,943,674		次年度へ繰越	7,357,910	
合計	15,857,995		合計	15,857,995	

寄付者ご芳名

（50音順）　自　1989年4月1日　至　1990年3月31日

秋山恭子
秋山倶子
浅田幸
飯田百貨店
池田義明
池田富夫
石川芳秀
石山米造
市田克彦
伊藤啓子
鵜飼信子
内山武志
大芦明
大岡信
大河原正子
大来佐武郎
太田義秋
大谷宗太
大本貞堅
尾形仂道
小川喜一
奥山善
小河静
織田糸美
折戸正明
賀川友吉
加治甚吾
片桐武昭
勝又誠子
加藤晃
門村道子
金森なお
金田正一
鐘紡若里自由学院
上之郷利昭
河野憲利
神崎武子
岐阜盲学校
汲田冬峯
黒木輝男
小泉周二
肥塚隆
後藤良一
小長谷正夫
神戸合ライオンズクラブ
小森愛子
三枝礼子
酒井久江
酒井宣子
坂入操
佐古井貞行
塩月弥栄子
塩谷賢一
芝田熊雄（関西電気）
渋谷有教
白井雅人
昭和橋キリスト協会
菅原ふく子
杉山裕子
鈴木俊一
鈴村はる子
須磨こばとグループ
田井基嗣
高田馬場ライオンゴールド
高橋輝雄
田中雅治
谷内正史
田伏淳一郎
田村和風
辻井達一
徳江博
鳥羽田熙
中川みどり
中竹茂
仲村点字器
中山弘子
長倉恵美
長瀬弘
長屋久美子
浪岡嘉彦
西山敦子
日本新聞インキ
橋本勝利
長谷川一郎
八田公雄
早川義明
林鳳紘声
端山智弘
久本喜美子
藤井清光
細川隆一郎
毎日写真ニュース
前沢あや子
桝幸雄
松尾宏之
間宮製作所
水野まち子
南博
宮原満州男
武蔵野女子学院
村山敏行
村山知子
森典子
森泰雄
森本哲郎
藪内清
山岸信義
山口節子
山下武男
山内潤子
ユニセフ協会秋田友の会
吉田種男
吉田旬（おさむ）
吉永英明
米田昌徳
若林弘子
早稲田しん灸専門学校
渡辺直明
渡辺石油

協賛者ご芳名

（順不同・敬称略）

自　1989年４月１日
至　1990年３月31日

〈北海道〉
石谷建設工業
江差信用金庫
空知信用金庫
文化女子大室蘭短期大学
北海道薬科大学
四つ葉乳業
〈青森県〉
青森明の星短期大学
（金木）吉プロダクション
桜田病院
宮森正昭
〈岩手県〉
塩釜ガス
タカナシ乳業
〈秋田県〉
大滝運輸
大館市社会福祉協議会
㈱マルシメ
〈山形県〉
主婦の店鶴岡店
〈宮城県〉
鶴見屋商店
東北高校
東北電力㈱
〈福島県〉
会津総合中央病院
猪苗代町
白十字総合病院
ひめゆり総業
〈群馬県〉
㈱ソフィア
マックス㈱
〈栃木県〉
赤城村
鬼怒川ゴム
小口会計事務所
白沢電気
㈱電子工業㈱真岡工
檜山食品工業㈱
宮下眼科医院
〈茨城県〉
井坂　啓
石津建材㈱
伊勢　甚
伊奈町役場
茨城県公営事務所
茨城倉庫
茨城県食料販売協同組合
茨城ヤナセ㈱
神栖町社協
白菊酒造
鈴木　実
関彰商事㈱
第一スーパー
筑波町役場
三上建設事務所
美浦村役場
結城病院
〈埼玉県〉
熊谷記念病院
グローバルソフトウエア
大東ガス㈱
東京オイレスメタル工業
㈱日高カントリー倶楽部
町田税務会計事務
マツモト電器㈱
〈東京都〉
㈳浄宗東京本部
秋枝病院
麻布教育センター
㈱天塩
有賀信勇
有楢川スタジオ
育英
伊勢丹労組
イトーヨーカドー労組
今井通子
インターナショナル
植田まさし
江州建設㈱
エステー化学
オーク㈱
王子製紙
大林組
オリエンタル写真商事㈱
海外経済協力基金
花王㈱
柏木俊彦
花蔵院
兼松セミコンダクター
ホテル霞友会館
カルビー
カルピス労組
㈱紀文
教育同人社
暁星学園
九段会館
クラヤ薬品
京急開発
光文書院
弘和電機
㈱小林コーセー
金刀羅宮
㈱サウンドクラフト
サッポロビール
サンド薬品
三洋証券
資生堂労組
㈱社会調査研究所
昭栄化工㈱
商業労連
㈱しんきんクレジット
神東実業
順心女子学園
杉田製線工業
住友スリーエム
正則学園高校
専修大学付属高校
セントラルスポーツ㈱
全国理容環境衛生同業組合
相互ビルディング
ソントン食品
太知商事
台糖ファイザー
大鵬薬品工業
宝酒造
㈱武富士
立川ブラインド工業㈱
立川市
第一企画
第一相互銀行
第一証券
大東カカオ㈱
中央製薬
中外製薬
中真堂
中部建設
鶴川高校
㈱テーオーシー
寺内大吉
㈱ＤＣカード
電気化学工業
電源開発
東京都六市競艇事業組合
東京ビジネスカレッジ
東京専売病院
東京ガス
東京成徳学園
東京証券
東芝労組府中支部
東邦生命保険
東洋水産㈱
東洋証券
東和証券
常盤興産㈱
㈱豊島園
トット基金
凸版印刷
中田輪業
永田　誠
ナショナル証券㈱
南長工務店
日清製粉
日本学園高等学校
日本舗道㈱
日本ロシュ㈱
日本アイビーエム
日本勧業角丸証券
日本証券金融㈱
野沢米穀店
野津漬物食品㈱
野村証券
㈱服部セイコー
早川ダット工場
日野自動車羽村工場
深沢　信夫
フコク生命研修センター
富士ゼロックス
㈱文祥堂
ホウライ乳業㈱
㈱ホリ企画
ポッシェ㈱
町田蛍友会進学教室
松井証券㈱
マリンフーズ㈱
㈱マルシンフーズ
丸見屋食品工業
三越百貨店労組
三菱電気労組
武蔵工大
武蔵野女子学院
村田建設
明星学苑
八幡建設
山一証券
㈱山田洋行
山田森一
ヤマト商会
㈱ユカ
豊商事
ユナイテッドスチール
ユニオンソース
ユニバーサル証券
横山光輝
立正校正会高校
レブコ
レリアン㈱
ロッテ労組
渡辺酒造
渡辺富工務店
〈千葉県〉
我孫子市役所
石島胃腸病院
江尻　隆
㈲岡田不動産
光葉企業
千葉県高教組
㈱千葉日産サニー
東洋エンジニアリング
富里町
習志野鉄工団地協同組合
日整学園
ボーソー油脂㈱
森永エルビルカントリークラブ
渡辺建設
〈神奈川県〉
味の素川崎工場
伊豆箱根鉄道
磯子ミリオンボウル
一幸電子工業
上明戸歯科医院
㈱上野運輸商会
英数研究所
小田原湯本カントリークラブ
小田原市
神奈川相互銀行
神奈川銀行
川崎大師平間寺
関東自動車工業労組
㈱コヤマドライビングスクール網
自治労神奈川県本部
西相信金
千代田計装
㈱東海金属
東邦電線工業
内藤電誠工業
中丸荘一郎
中丸事務所
日栄運輸倉庫
日本電子機器
日本電子無線
ハニーミルク
平塚競輪主催者協議会
藤沢さいか屋
富士スーパー
㈱丸う田代商店
ミナトエレクトロニクス
湯河原カントリークラブ
横浜高島屋労組
横浜女子商業学園高校
横浜エージェンシー
〈山梨県〉
北富士農協
㈱シチズン電子
忍野村役場
日新工機山梨工場
山梨県建設業協会
ヤマビ液化ガス
〈新潟県〉
伊藤製作所
大川設計
スズキ新潟販売㈱
ダイハツモータ
中野建設工業㈱
新潟日産自動車㈱
㈱新潟ダイハツモータ
日本マネージメントアカデミー
三原田組
〈富山県〉
大川寺病院
笹島工業
トナミ運輸
〈岐阜県〉
岡三証券
奥濃飛白山観光㈱
岐阜瓦斯㈱
岐阜経済大学
柳津町役場
㈱吉川組
〈長野県〉
国語作文研究所
サニーカントリークラブ
日精工エスビー機械㈱
松本歯科大学
〈静岡県〉
アスモ㈱
伊東カントリークラブ
河津町役場
小松川ガス
静岡英和女学院
清水市福祉課
新南駿病院
瀬尾記念病院
瀬尾整形外科病院
ニッセー
日本大学三島高校
松菱
八洲水産
ヤマハ発動機
〈愛知県〉
中京大学
中野酢店
〈石川県〉
粟津農協
（学）金城学園
小松ウオール工業
十全会
竹田土建㈱
北菱電興㈱
北陸日本電気ソフトウェア㈱
北陸通信工業
宮地組
〈福井県〉
勝山生コンクリート
〈京都府〉
神慈秀明会
京都西高等学校
㈱互助センター
セレマ
東興社（日本ＩＢＭ）
龍神総宮社
〈大阪府〉
大倉建設㈱
㈱オカハシ
参天製薬
ダイセル化学工業
浜田印刷機
万有製薬
〈兵庫県〉
神戸市民生局
㈱ノーリツ
〈島根県〉
潤徳学園
同潤会病院
〈福岡県〉
福岡工業大学

トヨタから贈られたジープ、ネパールで大活躍！

ネパール盲人福祉協会のスタッフは、このジープを駆使して、カトマンズとバラ地区を往復します。

アジアの盲人に愛の灯を

東京ヘレン・ケラー協会

創立40周年記念

オリジナルテレフォンカード（2枚セット）

頒価　2,000円

ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第215条第4項および、法人税法施行令第77条第4項にかかげる社会福祉法人でありますので、所得税法第78条第2項第3号および、法人税法第37条第3項の規定が適用され、当協会に対する寄付金は次の通り、寄付金控除または損金算入について税法上の特典が受けられます。

1．個人の方が寄付をする場合は、
寄付金控除額＝(寄付金額と年間所得の25％のどちらか低い方)－1万円

2．法人が寄付する場合は、
一般寄付の場合の損金算入限度額の2倍まで、損金算入枠が拡大されます。

編　集　後　記

1989年（平成元年）から「農村リハビリ」と称するプロジェクトを開始したが、インドのネパール王国に対する国境封鎖による経済圧力や、国内の政変等により実行が半年余り遅れた。しかし現地のＮＡＷＢ（ネパール盲人福祉協会）の努力により、本年に入り動き始めた。

なにぶん当協会にとってははじめてのプロジェクトなので、果たしてこれでよいかと全く手探りのようなところもある。何の措置もなく土間に放任されていた盲児が、歩けるようになり学校にも通えるようになるのは、2、3年先のことになろうが、彼らの喜びを考えるとそれに要する時間や費用は問題ではないような気がする。明治初年の我が国の農村にも、こうした盲児たちがいたというから、ひとごとではない。日本の善意ある人々のご好意にすがりながら、この仕事を続けていきたいとつくづく思うのである。アメリカ、カナダ、西ドイツもネパール王国で農村リハビリのプロジェクトを開始しているだけに、我が国の成果が大きく期待されている。(井口淳)

TOKYO
HELEN KELLER
ASSOCIATION

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169　東京都新宿区大久保3－14－4
毎日新聞社早稲田別館内
TEL（03）3200－1310
郵便振替　東京5－91688
銀行口座　三井銀行 新宿支店 普通預金 5101190